

2020年10月17日 自然を語る会

日比谷図書文化館セミナールーム+zoom

参加者：14名

テーマ：南極について

南極観測隊の船「しらせ」について。

南極観測隊越冬隊は11月に出発して翌々年の3月に帰国、約1年と4ヶ月の任務となる。今年も61次隊、渡貫さんの時は57次隊だった。越冬隊に対して、夏隊もあり、それは越冬隊と一緒に11月に出発するが翌年の3月に帰国する。次の62次隊は11月に出る予定だがコロナで人数や時期などの様子が変わるかもしれない。

「しらせ」は海上自衛隊の船、砕氷船。水や海底の泥の採取など、観測をしながら昭和基地に向かう。到着まで3週間くらいかかる。帰りは翌年の2月中頃昭和基地を出航。

57次隊の夏隊が帰るときオーストラリアの船が座礁したため、「しらせ」が帰る途中で救助するというアクシデントがあった。

しらせをどこに停泊するかも問題。なるべく昭和基地から一キロ以内に停泊しないと行かない。というのは持って行く荷物の重量の半分は燃料でそれをパイプで送るのだが、そのパイプの長さが1000mだから。氷の厚さなどは毎年違うので停泊場所もその時に応じて選ぶ。

『南極で心臓の音は聞こえるか』59次隊員の著書にオゾンホールと温暖化の話が出ている。南極半島の方は温暖化が進んでいるが東側の方は温暖化が進んでいなかったのだそうだ。その理由をよくわかってはいないけれど、どうやらオゾンホールと関係があるらしい。オゾンホールがあるおかげで逆に東側地域では温暖化が進まなかったのだが、フロンガス対策をしてオゾンホールが小さくなってきたため温暖化が進んできたのではないかということが言われている。

9月の毎日新聞に、42年ぶりに南極点に越冬したという話がでていた。アイスキューブという太陽系以外からの宇宙からのニュートリノを捉える装置でのことで、この装置は、2012年に宇宙からのニュートリノを2個捉えた。

南極全体を眺めてみて、各国の基地の歴史を眺めると、国際的な勢力の変化がわかる。中国が基地を作ったのはいつ頃か、日本はなぜ大陸に基地を作れなかったのかなどを眺めてみると歴史を考え直すことができる。大きな研究をするためには研究費が必要だけれど、それを潤沢に使えるにはその国の経済力がものをいうわけで。

最初のころは日本が戦争に負けて、オングル島しか与えてもらえなかった。あのころは日本は仲間に入れてもらえないようなところがあった。おまけに最初の南極船宗谷は氷に閉じ

込められてしまって、ソ連のオビ号という砕氷船に助けられた。カラフト犬のタローとジローの話もその時のこと。

疑問もいろいろ提出された：

- ・南極で地磁気の研究もされているが、地磁気逆転は人間に何か影響があるのかどうか。
- ・南極ではコロナは関係ない？ O157 は昭和基地でも出たらしいが。基地の中は暖かいからウイルスを持ち込んだら繁殖するのでは？
- ・研究者を支える設営舞台の苦労話も聞いてみたい。研究者だけでは成り立たない、下支えの人がどうしても必要。
- ・昭和基地は夏は雪がないらしいが、そんなときに植生があるかどうか。全くないのか・・・
- ・極夜、白夜はどんな感じなのか知りたい。
- ・しらせの中で、南極観測隊員には何か役割があるのか？キッチン設備はしらせと昭和基地のどちらがいいか？

最後に、『南極で心臓の音は聞こえるか』の中に「地球自体は温暖化も寒冷化も、大きな変化を何度も経験している。我々が地球を守るなどというのはおこがましい、温暖化で困るのは人類であって、だからなんとかしなくてはならないのだ」と書かれていたと報告されました。確かにその通りですね。

(文責：小川)